に用いる表現である。『紅毛雑話』に描かれたかつらは、田沼時代の象徴のように思われる。

漢語洋書の日本への渡来

国際基督教大学教授　斯波義信

幕末・明治期の日本人は、中国で漢訳された洋書（中国では「西学書」という）を広く読んで国際知識を培っていた。有名な一例として、明治三年に大学規則が制定されたとき、その一科目に「万国公法」があった。これは一八五〇年、開国してまもない清国に来た米人宣教師のマーティンが、米人学者のホイートン著の『エレメンツ・オブ・インターナショナル・ロウ』を漢訳し、その一八六四年（同治三）の刊本を、翌六五年（慶応元）、幕府の開成所が訓点や地名人名の読音をつけて翻刻し、そのほかにもいくつかの訓点本などがあいついで発刊されていて、いまでいう国際法の概要が中国の漢訳書をへて周知されていたことを語っている。

中国で西学書を漢訳して印行するならわしは、マテオ・リッチの渡来（一五八三）から一七二四年の禁教までの時期、そして一八四六年以降の宣教師の活動に対する制限の緩和の時期、という二つの昂揚期を伴って推移した。こうした西学書が実際にどのようなものであったかは、梁啓超の『西学書目表』で知ることができる。

日本でもいわゆる鎖国の前、すなわち南蛮貿易そしてキリシタン文化華やかな時期から、宣教師の書物をはじめとする西学書が渡ってきた。しかし鎖国政策と前後して一六三〇年（寛文七）、キリスト教の教義書や兵書などの入国をさし止める禁書の制が布告される。禁書の大半はリッチの弟子、明末の李之藻が編纂した『天学初函』という叢書、五三巻であった。内容は『天主実義』などの教義書は当然ながら、ほかにリッチの『坤輿万国全図』を増補して世界五大洲の地理、風俗、産物を詳説したジュリオ・アレニの『職方外紀』などの世界地理の書、そして『幾何原本』をはじめ天文、算法、測量などの西洋科学書を収めていた。一六八五年、禁書の書目はさらに追加された。

幸いにというべきか、八代将軍吉宗は一七二〇年（享保五）に禁をゆるめ、天文、暦学、算法などの実用的な西学書の輸入を認めるようにした。吉宗は先代の家継の発布した正徳新令のあとを承けて、貿易の引き締めと殖産興業に力を入れた。そして洋学を振興するとともに実用書と目される漢籍および漢訳西学書から知識を手に入れることに熱

心であった。

やがて『職方外紀』などは、あるいは転写され、あるいは解禁を受けて国内に流布した。さらに幕末にはレッグの『智環啓蒙』、ミュアヘッドの『地理全誌』などが読まれていた。また西学書ではないが、魏源の『海国図志』、『聖武記』などの世界地理・地誌を盛りこんだ書は、長崎会所の購入書のなかでもひときわ人気のある舶来書であって、幕閣や学問所に重要書として蔵されたという。江戸時代における諸藩校や蔵書家の書屋には、地方志、会典、詔令奏議、地理、職官、政書、農書、医書、算書、本草などの唐本、あるいはその和刻本がおびただしく収蔵されていたが、西学書をこれに含めて考えたとき、漢文を介して日本に伝ってきた海外知識の量と奥行きは意外に大きかったと見てもよいであろう。日本人には漢語や漢文に長い間、馴れ親しんできたという背景があり、これに支えられて開国から明治にかけて、日本漢語によってあまたの西洋伝来の概念を「行政」、「司法」、「立法」、「真理」、「命題」、「自由」、「進化」、「宗教」などの用語に訳出してきた。西学書からの学習の延長といってもよいだろう。

加えて、中国における出版と情報のセンターとしての江南、なかんずく上海への近さからいえば、長崎は北京よりもさらに近くにあった。書物はもとより、長崎で記録された『唐人風説書』、渡来した通事、医師、文人、画家、商人、そして舶来の唐物、文芸、音楽、絵画、百科知識などなど、異国情緒や異国趣味という形で伝ってきた外からの情報のもたらした有形無形の影響も見逃すことはできないだろう。

日本の開国と琉球

東京大学助教授　横山伊徳

今回は「世界の中の日本」のあり方が大きく変化した十九世紀について、琉球を素材にしてペリー来航までを概観した。すなわち十八世紀中期までは、西欧の琉球に関する知識はどちらかと言えばout of dateで、かつてシナ海の交易大国として栄えた琉球王国のイメージを強く残すものであった。これが急速に変化してくるのは、有名なクックの太平洋探検を補ったイギリス海軍軍人ブロートンの宮古・那覇寄港（一七九七年）からである。彼の探検航海は、日本近海のはじめての科学的測量航海であり、このとき収集された琉球語がヨーロッパにおける琉球語研究の端緒となったと言われている程である。